
変わらない日々

美都羽

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

変わらない日々

【Nコード】

N9234A

【作者名】

美都羽

【あらすじ】

主人公は変わらない日々を過ごしているが、両親が他界し一人暮らしをはじめ…

プロローグ（前書き）

この小説は完璧にヘタレ作者の作品です。
出来の悪さに携帯、パソコンを破壊してしまったても私自身は一切責任を負いません。

プロローグ

いつか親父は言ってたな、変わらない日々が続いてもいつかは変わる日が来るって。

まあそれがいつかはわからないけどな。

親父も母さんも死んじまったからもう聞けない。
死んだ次の日にはばあちゃんから電話がきた。

「私の家に来てもいいんだよ？」

姉貴もそういつてた。でも俺は

「いやいいよ、一人で頑張ってみるから」
って断った。

それから俺は高校生になったんだよな

いつもの風景

「ふああ…」

俺はいつもの様に学校で授業を受けている。それにしても学校の授業は暇すぎる、もう少しユーモアがあっても良い気もするのだがこっちも授業を教えてもらってる身だし贅沢はいえないか。

キンコンカンコン…と授業終了のチャイムがなった。

「んん、やっと終わったか」

そう言つて俺は後ろを振り向いた

「zzz…」

全くなんで寝てるんだよ、仕方無いから起こしてやることにした。

「おい起きろ、授業終わったぞ」

そう言つて肩をゆする

「おお…そうか、サンキューな」

目を擦りながら体を起こしたのは俺の友人。

「修、やっと起きたか」

「悪かったな」

すこし怒った様に聞こえたのは気のせいだと思う、うんきつと気のせいだ。

つと紹介がおくれたけど、こいつは俺の友人の三笠 修だ。

「おさむ」

じゃなくて

「しゅう」

間違えたとんでもなく怒る。

チヨンチヨン

「ん？」修と会話をしていると不意に背中をつつかれたから俺は後ろを振り向いた。

「どうしたんだよ」

俺が後ろを振り向いた先には昔からの知り合いがいた。

「瑞樹って今日用事ある？」
つとミスったな…主人公の俺の紹介が随分遅れた。
俺は月城 瑞樹、そして俺に話掛けたのは幼馴染み？の日光 日和
な、なんか太陽見たいな名前だけど、本当に太陽みたいな奴だ、ま
あそれがうつとうしい時もあるんだが。しかしながら日和には感謝
すべきだよな、俺が落ち込んでればなんとかしようと色々してくれ
るし、本当に良い奴だ、うん。
と、話を元に戻さないと。俺はこの後特に用事はないんだよな、
なら正直にいうか。

「否、特に予定はないよ」
俺はいった。

「ほんと？じゃあ一緒に帰ろ？」

日和は言う訳だ、これもいつもと変わらない台詞。

「まあ、いつも帰ってるし別にいいよ」

「じゃあ帰ろつか、修ちゃんはどうする」

修の反応を待つ。

「いい加減ちゃんて言うのやめてくれよ…」

「ええー、いいじゃんかわいいしー」

「いやいや俺がよくないの！」

「むう、修ちゃんのケチ、もう一緒に帰ってあげないから！ー」

おいおい、日和よお前は子供か…

言った所で意地悪って言われておわりだ。

「まあとにかく帰ろうぜ日和？」

俺はいった

「うん」

と、元気な声が帰って来た。

「じゃあな修。」

「ばいばい修ちゃん、なんかあったらメールするよ」

日和は言う、それに反応して修も口を開いた

「ああ二人共またなあ。」

「さてと、帰るか」

「そうだね」

「じゃあ玄関で待ってるよ」

なぜ玄関かは理由がある、俺の学校は男子と女子で靴箱が別の所にある。だから玄関

「さて…日和はまだか」

俺がそうつぶやくとほぼ同時に日和の姿が見えた

「おまたせ瑞樹」

「ああ、それじゃ行きますか」

俺はそう言って歩き出す

「はいはい。」

それに日和も付いて来る。

俺達は普通に歩き家までは中間に差し掛かった頃日和が口を開いた

「あのおのさ」

「どうした日和？」

「明日おやすみだね？」

「ああ、そりゃ土曜日なんだから当たり前だろ」

「じゃあさ、明日みんなで泊まり会しようよ、瑞樹の家で」

「はい？」

俺は一瞬理解出来なかった、何故にお泊まり会で何故に俺の家なのか。

「なあ日和、なんで俺の家なのだ？」

「だって瑞樹の家が一番自由に使えるじゃない？」

ああ、そういうことか、だから俺の家なのか。

「それはいいけど、どうせなら夏休み入ってからにしないか？」

俺が夏休みになってからといったのは夏休みが近いからだ、来週学校へ行けばもう終業式、つまりは夏休みだ。

「むう、瑞樹が夏休みがいいならそうするよお…」 ちょっと不貞腐れた様な声だ

「だからそれまで待ってくれな」

「うん、楽しみだなあ、みんなも誘ってお風呂だけは私の家ね」

そうそう言い忘れてたけど、俺と日和の家は向かいあってるんだよな。だからお風呂だけは日和の家に出来るわけだ。「じゃあ夏休み始まったら最初の日でいいか？」

「うん」みんなも誘ってね、なんなら一週間くらい泊まっちゃおうか」

ん？ちよつとまで、些か時間が長くないか？

「なあ一週間は長くないか？」

「大丈夫だって」みんなでいれば短く感じるから」

まてまて！そういう問題なのか！？

「はあ、日和には勝てないか…しゃーない、いいよ。」

俺はいやいやの様な振りをしたけど実際は嬉しい。

両親が死んでから、長い休みは孤独感を覚える様になった。
まあ日和がいたからそこまでひどくなかったけどな。

「やっぱり瑞樹だね」結局は承諾してくれるもん」

お前が聞く耳もたなかっただろうがなどとは口が裂けてもいえないけどな。

「ったく、じゃあ夏休みの最初から一週間くらいでいいのか？」

「うんうん、それと誘う人なんだけど。月曜日に聞いてみようね？」

「そうだな、家着いたけど、どうする？」

「ん〜、私は得に用事ないよ〜？」

「そっか、じゃあどっか行かないか？」

「デート？」

「なんでそうなる、一緒に出かけるだけだろ」

「な〜んだつまんない、まあいいよ、どこ行くの？」

しまった取りあえず誘ったもののどこいくかは決めてなかったな
とは行っても高校生が行けるところなんて限界がある、ゲーセンか、
飯食べにどっかいくくらいか。

「じゃあ普通に悪いけど、ゲーセンか…どっかになんか食へに行く
か？」

「ん、なんか食へに行こうか。夕飯もそこで済ませよう？」

「そうだな、じゃあ一旦帰って、準備できたらメールか電話してく
れな」「うん」ばいばい、また後でね」

そういつて日和は手を振る。

「ああ、じゃあな」

それに併せて俺も手を振る。

家は目の前だから扉をあければ入れる。

「さて、準備するか…」

そう呟いて家の鍵をあけ家に入る。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9234a/>

変わらない日々

2011年1月13日01時18分発行